目次に戻る

日本におけるアメリカ文学史

The History of American Literature in Japan

重　迫　和　美
Kazumi SHIGESAKO

キーワード：米文学史・米文学概論・英米文学講読・比較文学

はじめに

東京大学でアメリカ文学を初めて講じたのはLafcadio Hearnで，1898年である[1]。当時の日本において，アメリカ文学はイギリス文学の一部門に過ぎなかった。アメリカ文学がイギリス文学から独立した固有の文学として日本で認知されるようになったのは，昭和初期頃からである。日本で最も早いだろうとされる「アメリカ文学史」講義は立教大学のRobert E. Bundyによるもので，1928年である[2]。再び東京大学を例に取ると，1935年，齋藤勇が帝国大学の中では初めて「アメリカ文学史」を講じるようになった。60年代は大学にアメリカ文学講座が設置されるようになる。京都大学にアメリカ文学講座が設置されたのが1960年，東京大学が1962年である。

一般的に言って，「アメリカ文学史」という講義の設置は，アメリカ文学研究を歴史的に考える上で，二つの重要な意味を持つ。一つは「アメリカ文学」が固有のアイデンティティを持ったものとして認知されたことであり，もう一つは，評価に値する作品と作家が一定量以上あると了解されたことにより，アメリカ文学が「歴史」と呼ぶにふさわしい起源と展開を持つと認知されたことである。当然，そこには，それらの意味を決定的なものにしようとする文学史編纂者の思惑が潜んでいる。アメリカ文学のどのような特性をアイデンティティと定め，アメリカ文学のどの作品と作家を評価に値するものとするかは，編纂者にゆだねられているからである。

本論の関心は，アメリカ文学史で取り上げられる個々の作品や作家，あるいは社会背景にではなく，文学史編纂者の思惑に向けられている。アメリカにおいては，特に1970年代以降，文学史編纂者は自らの思惑に自覚的であるし，この方面の研究も盛んである。一方，日本においては，日本におけるアメリカ文学史の編纂者に焦点を当てた研究は多くはない。本論では，著者（編纂者）の文学史編纂方針に焦点を当て，第一章でアメリカにおける文学史の変化を概観する。次いで第二章と第三章で，日本においてアメリカ文学史がイギリス文学史から分離し始めた明治時代から今日に至るまで，日本人の手によるアメリカ文学史を概観し，その文学史の変化を明らかにする。

1　アメリカにおけるアメリカ文学史

アメリカにおいて「アメリカ文学史」の必要性が主張されるようになったのは，1829年のSamuel L. Knappの*Lectures on American Literature*頃からである。時は独立戦争からおよそ半世紀経った頃。世界的に帝国主義的ナショナリズムの機運が高まる中，アメリカ内部でも一国としての強固な国家アイデンティティを確立しようとする動きが高まった。Knappが序文で“you are aware that it has been said by foreigners, and often repeated, that there was no such thing as American literature,”と述べるように，アメリカ文学は長い間イギリス文学の模倣であると蔑視されがちだった。その序文をKnappは“Patriotism and greatness begin at the maternal bosom, are seen in the nursery and primary school, and quicken into

life in every advancing stage of knowledge. Guardians of a nation's morals, framers of intellectual greatness, show to your charge, in proper lights, the varied talent of your country, in every age of her history; and inscribe her glories of mind, and heart, and deed, as with a sun-beam, upon their memories.”と締めくくっており，彼の試みにはアメリカ生まれの文学を価値あるものとして教育の場で取り上げ，アメリカ人に愛国心と自尊心を植え付ける思惑があると言える。

20 世紀アメリカ文学史の代表は，渡辺利雄が指摘するように，*The Cambridge History of American Literature*（1917-21）（以下 *CHAL*），*Literary History of the United States*（1948）（以下 *LHUS*），*Columbia Literary History of the United States*（1988）（以下 *CLHUS*）の 3 冊であろう[3]。以下，順を追って編纂方針を検討しよう。

1917-21 年出版の *CHAL* は，序文において，固有のアメリカ文学史の存在を主張しようとした Knapp の意図を解説した上で，“the editors of the present work are at this point in accord with Knapp”（iv）と続け，Knapp の思惑を引き継いでいると明言している。この思惑のもと，採用された 4 つの編纂方針は，以下の通りである。

> （1）It is on a larger scale than any of its predecessors which have carried the story from colonial times to the present generation;（2）It is the first history of American literature composed with the collaboration of a numerous body of scholars from every section of the United States and from Canada;（3）It will provide for the first time an extensive bibliography for all periods and subjects treated;（4）It will be a survey of the life of the American people as expressed in their writings rather than a history of *belles-lettres* alone.（iii）

後に起こった編纂方針の変化を押さえる上で，注目すべき観点をあらかじめ指摘しておこう。第一に，方針の（1）にあげられているが，文学史の起源をどこに求めるかである。文学史の起源は文学の主流を決定する因子であり，文学のキャノン（canon）決定に大きく影響する。本書は文学史の起源を植民地時代からと定めている。第二に，方針の（2）にある，執筆体制である。本書は複数の執筆者による共著である。第三に，方針の（4）にある，文学作品の評価基準と社会の関係である。本書は，審美的価値がある作品だけに注目するのではなく，アメリカの「人々（people）」の「生活（life）」を映した作品を積極的に取り上げている。文学史に残る文学作品を選ぶ基準は，ただ審美的価値だけによるのではなく，現実社会が十分表現されているかにもよるとされているのである。

1948 年出版の *LHUS* の特徴は，一つには，タイトルにある“the United States”という言葉によく表れている。*CHAL* 出版以降，移民問題や世界大戦を経て，アメリカは自国が多民族社会であることに一層自覚的になった。一国家が多様な文化を内包するとしても，国家としてはそれらは混じり合い，統一されるべきとする文化多元主義的イデオロギーを背景に，アメリカ合衆国という国家アイデンティティの強化が図られたと言える。本文学史は，アメリカは多数の州が一つの国家として「統一された（united）」国家であるという見方を鮮明にし，*CHAL* よりもさらに，国家としての一体感を強調しているのである。実際，序には“We shall show that American literature differs from all the modern literatures of Europe . . . and thus has a quality which will presumably be characteristic of the literature of the future in a world society more mobile and yet more integrated than our own.”（xxv-xxvi）とあり，アメリ

カが独自の文学を持つという Knapp の主張を繰り返した上で，世界の未来文学を自国文学の特徴と重ねてその特質を“more mobile and yet more integrated”と述べている。

CHAL で指摘した三つの観点から編纂方針を検討すれば，*LHUS* は，*CHAL* の方針をそのまま踏襲するという立場を表明しつつ，それらの編纂方針を国家アイデンティティの強化にさらに役立てようとする思惑を持つことが透けて見える。第一の観点に関して，序には“We shall set in order the progress from colonies to republic, from republic to democracy, from East to West, from sections and regions to a national unity.”（xxvi）と記されていて，文学史の起源を植民地時代からと設定した上で，現在に至るまでの流れを一国家へと進化発展して行く過程と捉えていることがわかる。第二の観点に関しては，序で“Its literary history can therefore be best written by a group of collaborators, whatever the risk of differences of perspective or opinion.”（vii）と述べる一方，“Their contributions are related to one another within a frame rather than separately composed essays.”（vii）と述べており，多様な見方や意見が関連づけられて統一されていくとする文化多元主義的イデオロギーがここにも垣間見える。

第三の観点に関しては，序に 以下のように記してある。

> Literature as they have written it, and as the term is used in the title of this book, is any writing in which aesthetic, emotional, or intellectual values are made articulate by excellent expression. . . . Literature can be used, and has been magnificently used by Americans, in the service of history, of science, of religion, or of political propaganda. . . . History as it is written in this book will be a history of literature within the margins of art but crossing them to follow our writers into the actualities of American life.（xxii-xxiii）

文学が，単なる美的価値しか持たないものではなく，現実生活と密接に関わる実践的意味を持つものと捉える見方は Knapp 以来見られる特徴である。文学史で取り上げられるためには，優れた表現が必要であると同時に，社会的な何かに役立つことが必要なのである。

1988 年には *CLHU* が現れた。序によれば，*CLHU* の“exciting new critical perspectives and literary expressions”（xi）の背景には，“Events such as the Cold War, the war in Vietnam and the protests against it, the civil rights movement, the women's movement, and the struggles of various minority groups to achieve equity in American society have reformed the way many Americans view their nation and thereby their national literature and culture.”（xi）という社会変化がある。*CLHU* は従来の文学史，特に *LHUS* と対称的な性質である。後者の性質は“streamlined, uniform, and confident in its aim of useful service”（xiii）を特徴とするモダンであり，前者の性質は，“diversity, complexity, and contradiction”（xiii）を認めてそれらを構成原理とし，“closure”（xiii）と“consensus”（xiii）を求めないポストモダンである。

編纂方針の変化を先に上げた三つの観点から比較してみよう。第一に，文学史の起源について，*CLHU* は「合衆国」を“all of the countries on the North American continent”（xix）とし，「多様性（diversity）」がアメリカ文学の特徴であるとしている。一つの国家にある多様な声に注目するのが責務とされ，“the Native Americans, the Anglicans in England, the explorers of the Southwest, and the Puritans in New England”（xxii）の文化が 17 世紀アメリカ文化・

文学の起源とされる。第一部は先住アメリカ人の声で幕をあけることになる。

第二の執筆体制について，多数の執筆者が関わっている点においては *CHAL* や *LHUS* と変わらないが，*CLHU* はもやは統一や合意は求めない。文学史家と歴史批評家の批評意識が変わり，“No longer required to sound authoritative and magisterial, the voice of the individual critic can be more distinctive and personal.”（xviii）となったからである。

第三の文学作品の評価基準と現実社会との関係について，*CLHU* は，両者の関係に一層鋭敏になったと言える。批評意識の革命によって，批評家の興味は，以前は標準的なキャノンに含まれなかった作家に向けられるようになった。それら“female, minority, popular, and regional authors”（xviii）の再評価は，特に“from social and political perspectives”（xviii）のものだった。実際，*CLHU* には，例えば第三部の“Literature and Culture”等，それぞれの部に，文学にしばしば表れる社会的・政治的緊張を解説するエッセイが組み込まれている。

以上，アメリカのアメリカ文学史編纂方針をたどってきた。それは，アメリカ合衆国という国家のアイデンティティを，アメリカ自らがどのようなものと示そうとするかによって変化してきたと言える。19 世紀，アメリカはイギリスから独立した固有の文学を持つと主張したが，おそらくはその背景には，米英戦争（1812-14）に象徴されるように，米英間の緊迫した関係があっただろう。Knapp の文学史が出版された 1829 年の大統領が，米英戦争の英雄，Andrew Jackson であったことも，おそらくは偶然ではない。20 世紀初頭，アメリカは，自国を構成する多様な構成要素のうち，最も力を持つ要素を一つの中心と仮想して，一つに統一された自己像を描いた。20 世紀半ばに，自国を構成する多様な要素が，決して一つに融解することはないと自覚した当初も，しばらくはその自己像を捨てることはなかった。最初の *CHAL* と *LHUS* が，それぞれ世界大戦に近接して出版されているのは，おそらく無縁ではない。この時アメリカは，世界を牽引する一大国家として，世界に自己の強力な求心力を示す必要があった。20 世紀後半に，構成要素の多様性こそがアメリカ合衆国の特徴なのだと，*CLHU* が主張した時には，冷戦とベトナム戦争を経験したアメリカでは，自らの大義の正当性を疑う声が高まっていた。この多文化主義の国家アイデンティティは，グローバル化が進むと同時に民族や宗教の対立が先鋭化する現代社会においても，いまだ通用するものである。

2　日本におけるアメリカ文学史：*CLHU* の影響以前

本章は，日本におけるアメリカ文学史の編纂方針の変化について，（1）アメリカ文学の起源，（2）執筆体制，（3）評価基準の（アメリカ及び日本）社会との関係，の三点に注目して検討する。特に，アメリカで自国文学史の一大転機となった *CLHU* に影響を受ける前の文学史を検討する。

西川正身によると，日本においてアメリカ文学史がまとまった形で初めて世に出たのは明治の末である。浅野和三郎が単著として記したこの冊子は『英文学史：付録　米国文学史　英詩乃種類及韻律法』（1908）というタイトルが示すように，もともと同著者の『英文学史』（1907）の巻末に付録として収められたものであった。

浅野は，アメリカ文学の始まりを，「欧州人民の移住以後に限られ，其以前に遡りて亜米利加印度人間に発生したる文学を其中に入るることなき也。」（1）と明言している。作品を選ぶ基準はイギリス文学との関係に大きく影響されている。第一章で植民時代を概観した後で，「要するに彼等は多忙なる新天地の開拓者にして到底其間に優れたる文学を生み得る筈なし。米国人士より見れば，割愛し難き文士も多少存ずべきも，吾人はただ鶏群の一鶴たるフランクリンに就きて説かば足りぬべし。」（7）と述べ，その Benjamin Franklin の解説を「十八世紀英国民の代表的人物也。…シャフツベリィ，アディスン，ポープの亜流にして，出世間的，狂信的なる当時のニュー・イングラン

ドの人士とは相距ること甚だ遠きを見る。」（11）と締めくくる。Franklin は，通例，アメリカを代表する人物とされる。Franklin のイギリス性を強調する浅野の評は，この文学者とアメリカ社会の関係を考慮していないように響くだろう。

こうした浅野の態度は，一見，イギリス文学のアメリカ文学に対する英文学優越主義的態度と同じであるように見える。しかし，浅野のアメリカ文学史に散見する，英文学優越主義的主張をよく見ると，当時の日本がどのような自己像を描こうとしていたかが垣間見える。例えば，「［アメリカ文学は］北米の植民地に勃興したる英文学の枝脈のみ，連続のみ。…英国民は全世界に膨張し，豪州，加奈陀其他到る所に有力なる植民地を形成しつつあり。是等の諸地に発生せる文学はほぼ米国文学と同一条件の下に在りといふべし。」（1-2）という彼の主張は，彼のアメリカ文学に対してイギリス文学を優越とする見方が,（文化的に劣った）植民地（＝アメリカ）対（文化的に洗練された）先進国（＝イギリス）という概念構造に支えられていることを示している。その概念構造は，日本を先進国側として，（文化的に洗練された）日本が（文化的に劣ったと日本が見なす）諸国を支配下に置こうとする，明治後期の日本の帝国主義的国家戦略と一脈通じていると言えるのである。

アメリカ文学史がイギリス文学史の付録としてではなく，独立した一国文学史として，日本で初めて出版されたのは，おそらく，高垣松雄の『アメリカ文学』（1927）であろう。一般的に，本書出版は日本におけるアメリカ文学研究の記念すべき第一歩だと評価されている[4]。

単著である高垣の『アメリカ文学』は，「合衆国創建以後に於ける文学の発達」（1）を跡づけたものである。前編と後編から成り，前編は 19 世紀初頭から 20 世紀初頭に至る期間の代表的な文学者を扱っている。取り扱う文学者の選定を，高垣はアメリカにおける文学作品評価の見直しを踏まえて行っている。第二次世界大戦が開戦される前の比較的安定した時代の恩恵もあってか，国家イデオロギーを反映する記述は見当たらず，高垣の文学史は，一見，アメリカの社会と文学の関係には鋭敏である一方で日本の社会とアメリカ文学の関係には無関心であるように思える。

しかし，高垣の『アメリカ文学』出版頃の日本において，アメリカ文学がどのように受容されていたかを解説する西川の助けを借りると，高垣の文学者選定が日本社会と深く関わっていることがわかる。西川は，第一次世界大戦が終わる頃に社会主義運動が盛んになり，Jack London や Upton Sinclair が読まれるようになったこと，明治末期以降から起こった新劇運動が，Eugene O'Neill の劇をしばしば上演したことを指摘している。高垣は London と Sinclair に見出しを与えているし，とりわけ，O'Neill には一章分を割いて詳細な解説を施している。また，西川が，大正の始め頃に Edgar Allan Poe が広く読まれたのはおそらく谷崎潤一郎や佐藤春夫などの唯美主義と関係があると指摘しているのも見落とすべきではない。当時，唯美主義，自然主義，プロレタリア文学の文学運動が展開されており，日本においても文学は何のためのものか，という議論が行われていた。既に見たように，アメリカにおいては，文学的価値は，かなりの程度，その作品に社会的意義があるかどうかによって決まる。日本における文学運動上の主義論争とアメリカのキャノン見直し論争とは，全く位相が異なるけれども，双方とも芸術としての文学とは何かという疑問に突き当たる点で共通している。文学の社会的意義がアメリカほどは重要視されているとは思えない日本において，アメリカでキャノン見直しが行われる度に評価が浮き沈みする Poe のような芸術至上主義の文学者は，擁護するべき対象となる。高垣は，Poe を Washington Irving と比較して，「不幸なる芸術家の天才と作品が今日愈々深く研究されているのに，幸福にして不満を知らぬアーヴィングは，その名声こそ広く響いているけれども，彼の著作が中等学校の教科書以上に出でないというのは，我々に再考を要請する問題でなければならない。」（47）と述べ，文学を芸術作品として評価しなければならないという立場を表明している。

1941年には，齋藤勇の単著『アメリカ文学史』が出版された。本書は齋藤が東京大学文学部で行った講義を基に執筆されたもので，多くの版を重ねることになった。本書の第一章は，17・18世紀の植民地時代に始まる。時代背景の説明の後，「清教文学」の概説が始まる構成で，当時アメリカで一般的だったアメリカ文学の起源をそのまま受け入れている。

一方，評価基準とアメリカ社会との関係については，その強固なさまに対する意識が高垣よりも高まり，反発するかのような記述も見える。齋藤は緒論において「アメリカにおける文学史研究法は，イギリスに於けるとは趣を異にしている所がある。…その特色は世相史的，社会史的研究法である。…その判断は，文学としての第一義的価値（intrinsic value）に対するよりも，当代の人々をいかに反映しているか，又はいかに感動せしめたかという点に重きを置いている。…しかし或るイデオロギーの宣伝としての効果如何，又は或る科学思想を適用して成功しているか否かが，直に文学としての優劣を決する第一条件であると考え易い弊害を免れない。」（5-6）と述べる。齋藤は文学作品の社会的意義も評価してはいる。しかし，おそらくはアメリカで新批評が起こる前兆も手伝って，文学の本質的価値が重んじられるべきであるとする。その主張には，アメリカの文学評価基準に対する反発が読み取れよう。個々の作家や作品の論評にも，齋藤のこの評価態度が表れている。例えば，Herman Melvilleについて，齋藤は「Herman Melvilleの作は，散文も韻文も，幾多の欠陥がある。芸術品としての洗練を欠いていること，或る問題に没入して他を顧みないために彼の意味する象徴が難解又は不可解であることなどは，長い間彼を無名の淵に陥れておいた原因であろう。」（140）と述べ，芸術品としての洗練度を問題にするのである。

齋藤の『アメリカ文学史』は，アメリカの社会や文化を各章で詳しく説明しているが，その意図はそれらに作品を評価するための背景知識としての意義を認めるからではない。はしがき冒頭で，齋藤は，日本とアメリカの関係が密接であり，交渉がますます多くなるだろうとした上で，「アメリカ合衆国については，同国民の自叙伝である文学の歴史によって，手取早くアメリカ合衆国民の特性がいかような経路をへて今日に至ったかを知ることが望ましい。」（iii）と述べている。本書においてアメリカ社会と文化は，文学作品を通して理解に達するべき目標となっているのである。

1975年出版の『総説アメリカ文学史』は，大橋健三郎，斎藤光，大橋吉之輔を編者とし，総勢14人の執筆者を擁する。序で，*LHUS*を「画期的」（ii）と形容し，その出版に刺激を受けたと記されている。執筆体制も*LHUS*に影響を受けていることが，「新しい方法論や史観に貫かれた文学史というよりは，むしろアメリカ文学の伝統を新しく真実に描きとろうとしたもの」（ii）に他ならず，「その際，単独あるいは少数者の一貫した視点よりは，必然的に多数の寄稿者の参加による多層的な視点の糾合が要請された」（ii）という記述から読み取れる。「多層的な視点」から本書は書かれるが，目的はアメリカ文学の伝統を「真実に」描きとることであり，多層的な視点は最終的には一つに「糾合」される。アメリカ文学の起源も，*LHUS*同様，植民地時代と定めている。

文学作品の評価とアメリカ社会との関係については，序で「文学史における最も重要で，かつ困難な問題は，…個別的な細目，特に個別的な作家，なかんずく作品そのものの解釈説明と，それらを貫いている大きな歴史の流れの記述との関係をどのようにすべきか，ということであろう。」（iii）と述べて，「作品こそが文学の歴史を作り上げる肝心かなめのものであるからには，むしろ作品の解釈説明をこそ主軸とすべきなのだが，同時に他方，作品の解釈説明を並列するだけでは，文学史は成立しない。ただ歴史の流れだけを記述する方法は非としても，何らかの形での文学史への試みはなされなければならないのである。」（iii）と続けている。こうした熟慮の結果，『総説アメリカ文学史』は，〈作家と作品〉という項と〈概観〉という項を並列させる方法を取ることになった。それ以前の日本におけるアメリカ文学史に感じられる，個別の作品を自立した芸術として捉えよう

とする態度にやや傾きながらも，1948 年に *LHUS* が出版されて文学評価にますます社会的意義が加味されるようになったアメリカの批評状況への配慮がにじみ出ていると言えるだろう。

本書において，日本社会との関係で文学作品の評価が大きく左右されることは稀であると言って良いだろう。序の「私たちは，アメリカ文学の歴史を一つの他者として，相対的な関係においてそれを突き放して見つめ，かつ叙述し，もし私たち自身の自己本体（アイデンティティ）に関していうならば，そのように見つめられ，叙述されたものを，私たち自身の姿をそこばく照らし出すべき鏡のようなものとなすべきであろう。」（ii）という一文に客観的真実を映し出す（とされる）「鏡」が使われていることからも，自らは唯一の決定的な判断をせず，多層的な視点から照らし出すことによって，それらが糾合され，自ずと真実があぶり出されるとする考えが表れている。

この編纂方針の下，作家と作品についての記述は，賞賛と酷評と双方の立場の批評に詳しく言及し，結果として極端な独自の評価を下さないものになっている。例として，James Fenimore Cooper の項を見てみよう。

> Cooper は，登場人物の心理に立ちいって詳しい描写をすることは不得手なので，おもに外面から人物を描写した。…「恋愛」というようなある一定の心理の条件のもとでの肉体的・外面的変化は，人間誰しもあまり違うものではないので，人物が類型化する危険が生じる。それを避けるために，バルザックも指摘しているように，登場人物の口のきき方に訛りをもたせたり，奇妙なくせを与えたりすることが Cooper には多い。…けれども，このような欠点を逆手にとれば，こういう特徴があればこそ，Natty Bumppo は Richard Chase も指摘しているように，アメリカの神話の中の人物たりえたのだといえよう。…このような意味では，一見弱点にみえる Cooper の外面描写自体も，非常に有効なものとなっているのである。（63-65）

引用は心理描写が Cooper の欠点であるとする一方で，欠点とみえる特徴こそ Cooper に神話創出を可能にしたとする。Cooper が欠点を克服するためにとった方法を説明する際はバルザックが，Natty が神話的人物となりえていることを述べる際には Chase の名前が引かれている。

以上，本章では，*CLHUS* 影響以前の日本におけるアメリカ文学史をたどってきた。浅野の文学史には，アメリカを植民地と見るイギリスの優越感を共にする傾向があった。高垣の文学史には日本で受容されやすい文学作品に注目する傾向が見られた。斎藤の文学史には，アメリカにおいて作品評価がその社会的意義に強く影響されることへの強い反発が見られた。この反発は，浅野，高垣にも少なからず見えたものである。本章を締めくくった『総説アメリカ文学史』には，この反発は，個別の作品を優先するか，時代を優先するかという編者のジレンマとして表れていた。*LHUS* に強い影響を受けたこの文学史は，最終的には，双方のバランスを取るように努め，アメリカにおけるアメリカ文学史の様々な評価をも踏まえ，私的な偏った評価を避けて客観的な真なる評価を目ざそうとしたと言える。

3　日本におけるアメリカ文学史：*CLHUS* の影響以降

CLHUS（1988）は，1997 年にはその全訳も出版され，日本のアメリカ文学研究に大きな影響を与えた。本書の影響で，日本のアメリカ文学史に大きな二つの流れができた。一つは先の三つの観点全てにおいて，本書の影響を素直に受けとめたものである。『アメリカ文学史：コロニアルからポストコロニアルまで』（2000），『21 世紀から見るアメリカ文学史：アメリカニズムの変容』（2003），『アメリカ文学入門』（2013）がこの流れに属する。

もう一つの流れは，*CLHUS* を念頭におきながらも，独自の編纂方針によってアメリカ文学史を編んでいこうとするものである。この流れに属するのは,『アメリカ文学史講義』(1997-2000),『アメリカ文学史：駆動する物語の時空間』(2003),『講義アメリカ文学史：東京大学文学部英文科講義録』(2007-2010),『アメリカ文学史』(2010) である。共通する文学史編纂方針上の特徴を三つの観点から整理すると,(1) *CLHUS* において行われたアメリカ文学の起源の見直し，すなわち，キャノンの見直しを踏まえている,(2) 単著である,(3) 社会的意義が文学作品評価に与える影響を意識しているが，著作における作品評価基準が著者独自のものである。本論では，これらの観点から特に独自性が際立つものとして，第二の流れに属するものの中から亀井俊介の『アメリカ文学史講義』と平石貴樹の『アメリカ文学史』を取り上げたい。

亀井の『アメリカ文学史講義』は，東京大学教養学部の「アメリカの文学」という授業で，著者が実際に行った講義を，録音テープから起こしてまとめたものである。亀井は，序において，アメリカ文学史のキャノン見直し論争に触れた上で「しかしこの文学史は，そういう新しい動きを追いかけることが主眼ではありません。…まずは文字通りスタンダードなキャノンを知ってもらうことが大切だと思っている。皆さんはどうぞ自分で判断し，自分で新しいキャノンたりうる作家や作品を見つけたと思ったら，この文学史にぶっつけてほしい。」(13) と学生に語る。亀井はアメリカ文学史におけるキャノン論争を熟知していて，文学史で取り上げる作品の中には，*CLHUS* 以前には取り上げられることがなかったものも含まれているが，授業ではキャノン論争を追いかけないと宣言し，学生達には自らの判断でキャノンの見直しをするように働きかけるのである。

続けて亀井は,作品を評価する際の自らの立ち位置について,自分は日本人ですからと断って,「アメリカ人がアメリカ文学を論じる文学史とは，どこかで違ってくるだろうと思います。もちろん私は知識が乏しいので，アメリカ人によるいろいろな紹介や批評などを参考にすると思うけれども，最終的には日本人としての話をしていくことになります。」(13) と説明している。亀井は，アメリカ人によるアメリカ文学評価を参考にすると述べる一方，講義での最終的な判断は日本人として行うと述べている。アメリカでの文学評価が作品の持つ社会的意義に左右されることは既に述べた。亀井は，社会的意義によって文学作品の評価をしようとするアメリカのアメリカ文学研究に敬意を表するのだが，それを自らの最終的判断の基準にはしないと宣言しているのである。

では，最終判断の基準は何によって決まるのか。ここでは「日本人」としてしか言及されないが，基準を決めるのは「日本人である亀井俊介」その人であると考えて良かろう。なぜなら，亀井は，本文学史の真の目的を以下の二つの引用のように語っているからだ。

> ［この講義には］もうひとつ目的がある。…アメリカ人の精神というか，…心がどういうように成り立っていて，どういうふうに動いているか。…精神と社会をひっくるめたアメリカ文化の展開の仕方と合わせて，文学の展開を語りたいと思うのです。
>
> ですからこの文学史は，うまくいけばの話ですが，アメリカ文化の中の文学史というか，文化の営みの一環としての文学史になるのではないかと思っています。(14)

> アメリカでは，こういう自然尊重の精神と文明尊重の精神とが，真っ向から対立してきた。…これから語る文学史は，…その底流に自然尊重の精神と文明尊重の精神との争いという要素などもとらえ，その他いろいろ複雑な「心」のからまりが，どういう文学的な表現を生んできたかをたどってみたいと思います。(27-28)

最初の引用には，亀井の講義の「もうひとつ」の目的が，アメリカ文学史を素材としたアメリカ文化理解にあると示されている。次の引用には，アメリカ文化（精神と社会）の展開に，自然尊重の精神と文明尊重の精神の弁証法的発展を見る亀井自身のアメリカ文化論が示されている。

アメリカ文学の展開に自然対文明の構図を示そうとする亀井の本書における目的は，本書の作品評価基準に影響している。一例として，Cooper の項を見てみよう。*The Pioneers* 終幕における Natty の行動の意味を説明した後で，亀井は，「これはアメリカ人が本来的にもっていた自然志向と，荒野に秩序ある社会を建設しなければいけないという文明志向との，両方を正面衝突させた小説だということになります。たいへんな思想小説，観念小説といってもいい。…根本的には「アメリカ」の大問題を扱った小説といえるように思います。…『開拓者たち』という小説は，こうして，自然志向と文明志向という「アメリカ」の抱える根本的矛盾の中から，神話的ヒーローを生み出した。」（133-34）と解説し，最後に「アメリカの最も根本的な問題に立ち向かい，それをいろんな面から検討することを，フェニモア・クーパーは行った。壮大なアメリカの夢のロマンスをくりひろげ，しかも反時代的態度を押し出すことも恐れなかった。私は彼を大作家として，たいへん高く評価したい気持ちです。」（138）と述べて Cooper の項を締めくくる。『総説アメリカ文学史』における，Cooper についての絶妙なバランス感覚の評価は既に見た。斎藤の『アメリカ文学史』と高垣の『アメリカ文学』において，Cooper 評価は亀井ほどには高くない。亀井は，自然と文明の対立をアメリカ社会が抱える根本的「大問題」ととらえ，それに正面から取組む Cooper に誰よりも高い評価（「大作家」）を与えたと言えよう。

個人としての亀井俊介が評価責任者であることが，本書において，時に好みの問題として表れるのは興味深い。例えば，Henry David Thoreau と Ralph Waldo Emerson の関係を述べる際，亀井は「個人的な気持からいえば，私はソローの方に強くひかれる。エマソンは尊敬するけれども，遠くから眺めていたいですね。」（210）と語る。ここで亀井は，Thoreau と Emerson を「個人的な気持ち」によって評価している。本書においては亀井自身が語りの言説の担い手として，「私」という一人称代名詞を用いてしばしば介入してくる事実もここで指摘しておかなければならないだろう。亀井俊介の『アメリカ文学史講義』は，アメリカ文学史という体裁をとってはいるけれども，亀井俊介独自のアメリカ文化論になっていると言って良いのである。

平石の『アメリカ文学史』は，アメリカ文学のキャノン論争を意識していて，*CLHUS* 以前には取り上げられなかった大衆小説や SF 小説などを論じている。一方で，通例アメリカ文学史の中に入れられているはずの文学作品が取り上げられていない場合もある。

一見，キャノン論争を無視するかのような作品選択を平石が行っているのは，本書が独特の目的を持っているからである。目次に注目すると，第一部「伝統の形成―自我の原風景」，第二部「アメリカン・ルネッサンスの隆盛―自我をうたう／うかがう」，第三部「近代小説の展開―自我がためされる」，第四部「モダニズムの文学―自我がゆらぐ」，第五部「戦後文学―自我をつくろう」，となっている。一見して，本書が標準的なアメリカ文学史の年代区分を採用していないことは明らかであろう。巽孝之が指摘するように，今日の「アメリカ文学史常識」（vi）に従えば，「おおむね①ピューリタニズム②リパブリカニズム③ロマンティシズム④リアリズム⑤ナチュラリズム⑥モダニズム⑦ポストモダニズムという展開」（vi）となるはずで，それらの「主義」が歴史区分の見出しにキーワードとして使われることが多い。ところが，平石の『アメリカ文学史』で，時代区分上，最も重要な意味を与えられているのは常識的キーワードではない。各時代を貫いているのは「自我」という言葉なのである。

「自我」は，本書において，「固有の実体ではなく，いわば近代人が着ることを余儀なくされたユ

ニフォーム」（xx）とされている。自我が文学史を貫くキーワードになっているのは，ユニフォームである自我のありかたの変化に応じて小説も変化したと平石が考えているからである。彼は，19世紀末にアメリカにおいては近代小説ジャンルがいったん完成されたとし，その理由を，「およそこの時期に，近代的自我が完成したからだ」（xix）と言う。さらに言えば，平石が本書の目的を「「小説とはなにか」という問いに対して，実質的なひとつの解答例を見いだすこと」（xix）と定めているからである。平石の『アメリカ文学史』は，近代的自我の確立から，それがゆらいでまた新たなユニフォームとして確立される歴史の流れに沿って，様々に展開される小説のありようを追いかけながら，小説とは何かを究明する試みになる。本書独特の目的を達するために，目次の時代区分に「自我」がキーワードとして使われ，その時代の「自我」のありようを良く映すと平石が考える作品が，平石の『アメリカ文学史』を彩ることになるのである。

では，作品の評価基準について，亀井が「神話的ヒーロー」を生み出した「大作家」と評するCooperの項を取り上げて検討してみよう。平石は，亀井も論じていた*The Pioneers*終幕におけるNattyの行動に注目して，「基本的に，危機を乗り越えて開拓社会の発展が保証される，メデタシメデタシの筋書きと，それを助けながら批判も忘れず，最後には山中へ消えていく英雄的な主人公と，二重構造の物語」（43）と説明した後，「困難な問題に「擬似解決」をあたえることは，小説にとって欺瞞や錯誤ではなく，むしろひとつの栄誉である。なぜなら，小説の責任は本来，問題を解決することではなく，問題を困難なままに体現する，矛盾をはらんだ人物像を，そのまま提示することであるからだ。…ナッティ・バンポーの登場が，アメリカの矛盾を正当化し，隠蔽する「神話」から，その矛盾を生きる「小説」への変化を，アメリカ文化にもたらした，と言っても過言ではないだろう。」（43）と論じる。平石によれば，小説の責任は問題解決にはない。小説は問題を抱え矛盾を生きる主人公を描くべきなのだ。葛藤を抱えた主人公が個人として生き生きと描かれているか，が平石の小説を評価する基準となっていると言っていい。

小説の社会的意義は，平石の小説評価基準においてどの程度の意味を持つだろうか。それは，John Dos Passosの*U.S.A.*を彼が論じる際の「社会そのものではなく，「社会の中の個人」を描かねばならない小説」（412）という彼の言葉と，Toni Morrisonの*Beloved*について彼が論じる際の「集団の歴史は，学習の対象ではあるかもしれないが，個人の自我をおぎなう，かけがえのない個人性とは―したがって小説とは―不協和であるほかない。」（525）という彼の言葉に表れている。「「アメリカ社会全体を再現する」という意図が，やはり壮大すぎた」（412）*U.S.A.*と，母と娘の家族の物語が「女性たちの歴史の持続という，いわばモリソン自家製の「大きな物語」に回収」（525）された*Beloved*を，平石は，社会と歴史を描くことに重きをおいたが故に個人が十分に描ききれていない点で批判している。平石にとって，小説の評価上重要なのは，社会的意義よりも，葛藤を抱えた個人が生き生きと描かれているか否かなのである。

平石がこのように「個人」にこだわるのは，先に述べたように，彼が小説のありようと「自我」のありようを関係づけているからであろう。小説家でもある平石の，実作者としてのこだわりであるかもしれない。これほど個人の生き生きとした生き様にこだわり，それを描いているかどうかを作品の社会的意義より重く見る文学史はあまり例がない。平石は，文学作品の評価を決める基準を自ら定め，その個人の基準でもって作品を論じ，文学史を編んでいるのである。

本書において，亀井同様，平石の個人的な感想めいた言説が織り込まれているのは興味深い。Norman Mailerの*The Naked and the Dead*と*An American Dream*について，平石は実存主義的感覚とアメリカ社会のMailerの描出を一応は評価した上で，「だが…「もっと真剣に自分のことを書けよ」と，読者にふと思わせずにはいない。」（533）と言う。この「読者」は間違いなく

平石自身を指している。実存主義的感覚や，アメリカ社会の現状への問題意識よりも，自分のことを真剣に書くべきとする評価は，平石の小説評価基準と一致するからだ。平石貴樹の『アメリカ文学史』は，アメリカ文学史という体裁をとってはいるけれども，平石自身が目論んだように，平石貴樹の小説論になっていると言って良いのである。

以上，本章では，*CLHUS* の影響以後の日本におけるアメリカ文学史の特徴を，亀井と平石によるアメリカ文学史を用いて検討した。二つのアメリカ文学史は，（1）キャノンの見直し論争を了解している一方で，自らは見直し論争と無縁な立場を取っており，（2）単著であり，『総説アメリカ文学史』あたりから今日まで主流を占める共同執筆体制ではなく，（3）文学作品の社会的意義には執着せず，著者個人が評価基準を自ら設定している。これらの共通点に加えて，両者とも，その語り口がそれ以前の文学史とは全く異なっていることも指摘しておきたい。「日本人」・「私」・「読者」として，評価責任者である著者が時折個人的な感想めいた論評を挿入する語り口は，それ以前の主観を廃した客観性を重んじる文学史の語り口とは全く異なっているのである。

おわりに

本論は，日本におけるアメリカ文学史の変化を，明治から今日まで，編纂方針を三つの観点から検討して考察してきた。三つの観点には，アメリカにおけるアメリカ文学史編纂方針の変化を調べるのに役立つ（1）文学史の起源（2）執筆体制（3）文学作品の評価基準と社会との関係を用いた。

第一の観点から日本のアメリカ文学史はアメリカのアメリカ文学史に常に影響を受けて変化したと言える。ただし，21 世紀にはキャノンにこだわらないものが見られるようになった。それらがキャノン論争を無視している訳ではない。観点（3）に関わるが，それぞれが独自の作品評価基準を定めるが故に，今日キャノンと見なされる作品であっても，文学史から割愛するのである。

第二の観点からも，日本のアメリカ文学史はアメリカのアメリカ文学史に影響を受け，単著から複数執筆者の共著へと変化したと言える。多数の専門家が関わることで，正確で豊富な情報を提供し，全体として偏りなく客観的な真実を示そうとする傾向が強くなる。ただし，21 世紀には単著となる場合も多く見られるようになった。再び観点（3）に関わるが，執筆者は自ら作品評価基準を定め，個人の責任において作品を評価して文学史を編む傾向が現れたのである。

最も興味深いのは，第三の観点から見た様子である。全体を通して言えるのは，文学作品に社会的意義を求めるアメリカのアメリカ文学史に対する違和感，反発が日本のアメリカ文学史家にあることである。一方，日本の社会状況がアメリカ文学史編纂に与える影響は，時代を経る毎に少なくなっていったと思われる。おそらく，文学作品と現実社会との繋がりを重視するアメリカの文学観への反発が影響しているだろう。20 世紀終わり頃までには，日本のアメリカ文学史は，アメリカにおける事実として，作品評価を左右するアメリカの現実社会には敏感である一方，日本の現実社会との関係には無関心になったと言えそうである。ただし，21 世紀には新たな傾向が見られた。筆者が個人として文学作品評価基準を定め，評価者としての責任を自らが負って文学史を編んでいくのである。この場合，作品の評価が社会と関係するかどうかは全く個人の見解次第となる。

以上の結論を，明治から今日に至るまでの日本におけるアメリカ文学史の変化とするには，あまりにも検討材料が少なすぎるという非難は甘んじて受けたい。この結論は，本論で検討した以外の文献も踏まえてはいる。しかし，筆者の手によって，未だページをめくられていないアメリカ文学史が多数残っているのは事実である。今後は，本論の検討結果を見取り図として，さらに文献を検討し，日本におけるアメリカ文学史の枝脈に渡る流れを究明するのが課題となろう。

注

1　東京大学でのアメリカ文学の扱いは，渡辺利雄 (2007) の第一巻まえがきが詳しい。

2　後藤によれば，昭和 3-4 年には，立教大学で「アメリカ文学史」の授業が行われていた。(19)

3　1994-2005 年には *The Cambridge History of American Literature* が出版されているが，編纂方針は *CLHUS* と大きく違わないので，本論では扱わなかった。

4　高垣による『アメリカ文学』について，西川は，「本著の出版によって，わが国のアメリカ文学研究は，ようやくその第一歩を踏み出した。」（283）と述べ，齋藤は，「日本におけるおそらく最初のアメリカ文学概観」（308）と述べている。

5　齋藤は著書の最終章で，20 世紀の学会及び評壇について書いており，Joel Elias Spingarn の言う“The New Criticism”に言及している。（281）

引用文献

浅野和三郎『英文学史』大日本図書，1907 年。

———.『英文学史：付録　米国文学史　英詩乃種類及韻律法』大日本図書，1908 年。

大橋健三郎，斎藤光，大橋吉之輔　編『総説アメリカ文学史』研究社，1975 年。

亀井俊介『アメリカ文学史講義』第 1 巻，第 2 巻，第 3 巻 南雲堂，1997-2000 年。

後藤昭次「高垣松雄と大正末期日本のアメリカ文学」『アメリカ研究シリーズ』3 号　立教大学，1978 年（18-29 頁）。

齋藤勇『アメリカ文学史』研究社，1941 年。

高垣松雄『アメリカ文学』研究社，1927 年。

巽孝之『アメリカ文学史：駆動する物語の時空間』慶応義塾大学出版会，2003 年。

西川正身『アメリカ文学覚え書』研究社，1959 年。

平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社，2010 年。

渡辺利雄『講義アメリカ文学史：東京大学文学部英文科講義録』第 1 巻，第 2 巻，第 3 巻，補遺版研究社，2007-2010 年。

Elliott, Emory, et al. eds. *Columbia Literary History of the United States.* New York: Columbia UP, 1988.

Knapp, Samuel L. *Lectures on American Literature: with Remarks on Some Passages of American History.* New York: Elam Bliss, 1829.

Spiller, Robert E., et al. eds. *Literary History of the United States.* 1946. Rev. 4th ed. New York: Macmillan Publishing, 1974.

Trent, William Peterfield, et al. eds. *The Cambridge History of American Literature.* 3 vols. New York: G. P. Putnam’s Sons, 1917-21.